

国立障害者リハビリテーションセンター  
「高次脳機能障害支援普及事業公開シンポジウム」  
2013年2月22日(三田共用会議所) 配付資料1

学齢期の高次脳機能障害の子どもが抱える修学・  
学校生活の困難・ニーズと教育支援の課題  
—保護者調査から—

高橋 智

(東京学芸大学教授、日本特殊教育学会副理事長)

共同研究者 池田理恵子

本日の内容(50分)

①教育支援における本人・当事者の視点

本人・当事者の困難・ニーズの調査から具体的な教育支援の手掛かりを探る。

②見えにくい「感覚や身体面の困難」への支援

発達障害との共通性、感覚統合障害(感覚過敏・鈍麻)、睡眠・覚醒リズムの調節困難、自律神経の脆弱性に起因する温度変化等への対応の難しさや自律神経発作等

③高次脳機能障害を特別支援教育の対象に

## 1. 問題の所在

### ○ 学齢期の高次脳機能障害の子どもの教育支援の現状

野口ら(2005)

「学齢期の高次脳機能障害児に関する統計はほとんどなく、教育的支援状況を示す資料も少ない」



**2007年度に文部科学省が特別支援教育の制度化**

高次脳機能障害は病弱教育、発達障害との重なりも大きい  
が、学齢期の高次脳機能障害の特別支援は、未だ  
試行錯誤の段階

### ○ 高次脳機能障害の子どもの復学

・栗原ら(2002)

「脳損傷児の大半は、退院後通常学級に戻っていくが、復学後の学校生活は決して順調と言えず、その原因の多くが高次脳機能障害によっている」

・野口ら(2005)

「学校では必ずしも適切な支援がされず、学習上の困難ばかりでなく、学校適応上の困難や友人関係のトラブル、いじめなど、学校生活には様々な困難が顕在化する」



**学校場面のストレス、いじめ、友人がいない、  
⇒孤立、不登校、暴力等の学校不適応**



## ○高次脳機能障害の障害認識

### 〈本人〉

- ・中山(1993)「高次脳機能障害は、損傷以前のセルフ・イメージとのギャップから自己効力感等の低下が生じる場合もある」

### 〈保護者〉

- ・栗原ら(2002)「受傷前の子どもへの思い入れが強く認められることから、家族が障害を正しく認識できないことが多い」



**学校における支援が不十分なため、本人・家族の障害の理解・受容が困難なことも学校における不適応の一因となっている。**



## ○これまでの先行研究

- ・医学的リハビリテーションに関しては、少しずつ知見が整理・蓄積されつつある。
- ・多くの高次脳機能障害児が、学習面のみならず、学校生活全般で困難を有している(栗原:2002)。



**本人・当事者の困難・ニーズや具体的な教育支援などの詳細についての検討はなお不十分**

## ● ● ● | 2. 報告の目的

本報告では、学齢期段階の高次脳機能障害を有する本人およびその家族が、就学・修学および学校生活においてどのような困難・ニーズを持っているのかを調査し、高次脳機能障害の子どもへの教育支援の課題を明らかにする。

## ● ● ● | 3. 方法

### (1)調査対象:

学齢期に高次脳機能障害を有して就学・復学を経験した子どもの保護者。

### (2)調査方法:

高次脳機能障害の当事者団体等のご支援のもと、調査協力が得られた82名の保護者の方々に質問紙調査法を実施した。あわせて了承を得られた10名の保護者の方々に聞き取り調査を行った。

### (3)調査内容

- ①本人の状況(高次脳機能障害の症状チェックリスト等)
- ②学習面の困難・ニーズ
- ③学校生活面(友人・対人関係等)の困難・ニーズ
- ④進路面(移行支援)の困難・ニーズ
- ⑤復学先の選択
- ⑥家族のニーズ
- ⑦今後の対応

### (4)調査期間:

2007年11月～12月

## 4. 結果

### 1)本人の状況

表1 現在の年齢 n=75

0～10代	34人	45.3%
20代	28人	37.3%
30代	10人	13.3%
40代以上	3人	4.0%

表2 受傷時の年齢 n=75

就学前	15人	20.0%
小学時(7歳～12歳)	35人	46.7%
中学時(13歳～15歳)	8人	10.7%
高校時(16歳～18歳)	17人	22.7%

- ・現在の状況は、在学中と既卒が半々。
- ・受傷原因は交通事故によるものが最も多かった(69.3%)。

表3 復学先の学校 n=75

通常学級へ復学	52人	69.3%
特別支援学級に復学	8人	10.7%
特別支援学校へ転学	8人	10.7%
復学できなかった(退学)	6人	8.0%

表4 障害者手帳取得状況 n=75

持っている	59人	78.7%
持っていない	16人	21.3%

表5 手帳種の内訳 (複数回答) n=73

身体障害者手帳	41人	56.1%
療育手帳	18人	24.7%
精神保健福祉手帳	14人	19.2%

- ・退院後はほとんどが元の学校(通常学級)に戻っている。
- ・障害者手帳を所有していない方が21.3%いる。

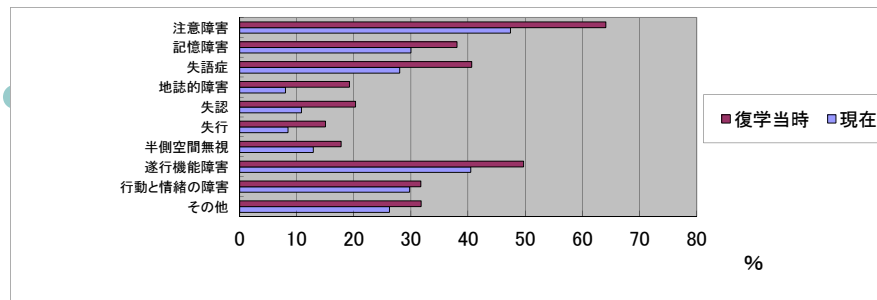


図1 高次脳機能障害症状の項目別一人当たりチェック率 n=75

- ・注意障害、記憶障害、遂行機能障害のチェック率が特に高い。
- ・「復学当時」に比べて「現在」のチェック率が有意に低くなっている。しかし「行動と情緒の障害」は復学当時と現在を比べてほとんどチェック率に差が見られなかった。

子どもの脳は大きな発達の可塑性・再生力があるため、  
適切な発達支援・教育支援対応によって状態像の  
変化・改善が十分に期待できる。

## 2)学習面における困難・ニーズ

表6 学習の困難の有無 n=75

学習の困難がある	67人	89.3%
学習の困難はない	1人	1.3%
回答なし	7人	9.3%

- ・全体の約90%の方が学習の困難があると答えた。
- ・特に「記憶力」に問題を抱えているものが見られた。
- ・記憶力の他にも「全く集中できない」「単純な計算はできるが文章題だと理解できない」などの声が多く聞かれた。

多様な高次脳機能障害の症状が重複しながら、それぞれが学習上の困難の要因となっていることが伺える。

## 「書くこと、読むこと、記憶力」の困難 n=75

学習面において、とくに記憶力に問題を抱えていると推察できる

	書くこと		読むこと		記憶力	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
問題ない	51人	68.0%	54人	72.0%	9人	12.0%
少し問題あり	14人	18.7%	11人	14.7%	34人	45.3%
問題が大きい	7人	9.3%	6人	8.0%	29人	38.7%
回答なし	3人	4.0%	4人	5.3%	3人	4.0%

- 「書くこと」「読むこと」については約7割の回答者が「問題ない」と回答している。一方、「記憶力」について「問題ない」と回答したのはわずか9名(12.0%)であり、84%が問題ありと回答している。高次脳機能障害当事者は学習面において、とくに記憶力に問題を抱えていると推察できる。

「学習の困難がある」と回答しているものは67名で全体の89.3%を占め、具体的に困難が見られる教科を尋ねると「全ての教科で困難である」、あるいは「国語」「算数・数学」に困難を抱えているという回答が比較的多かった

全ての教科で困難	26人	14.4%
国語	28人	15.4%
算数／数学	29人	15.9%
理科	22人	12.1%
社会	17人	9.3%
音楽	10人	5.5%
図工	15人	8.2%
体育	13人	7.1%
技術・家庭	6人	3.3%
英語	15人	8.2%
回答なし	1人	0.6%



表7 学習面における特別な対応の有無 n=75

特別な対応が行われた	43人	57.3%
特別な対応は行われなかった	22人	29.3%
回答なし	10人	13.3%

- ・学習上の困難に対して特別な対応が行われたとの回答は57.3%にとどまっている。
  - ・高次脳機能障害の理解が不十分なため、適切な支援がなされていないなかったり、放置されている。
- ⇒発達障害との困難とも共通し、特別支援の必要性

「テストを読んだだけでは理解できないので別室でテストを聞き書きで行ってくれた」「覚えるまで同じ漢字を宿題にしてくれるなど子どものペースでゆっくり対応してくれた」など、本人に合わせた指導・個別指導に関する記述が多かった

本人に合わせた指導、個別指導(補習)をしてくれた	24人
体育の授業のみ個別の配慮があった(部分参加、補助)	5人
特別支援学級で対応してもらった	5人
補助教員をつけてもらった。	4人
特別支援学校で個に応じた対応が行われた	4人
本人の気持ちを尊重しできるだけ希望を聞いてくれた(授業への部分参加等)	2人
病院・施設と連携して学習を見てもらった	1人
積極的に声かけやフォローをしてくれた	1人
友人とペアを組ませて(当番制)学習する方法があった	1人



学習面における保護者の要望の有無については「要望を出した」42名(56.0%)、「特に要望は出さなかった」26人(34.7%)と回答している。要望の内容は「個別指導」や「高次脳機能障害の理解」に関する記述が多く見られた。

本人にあった個別指導をしてほしい	12人
高次脳機能障害の理解	8人
補助教員をつけてほしい	6人
具体的な指導法や目標	6人
集中力低下のため行事・授業の部分参加などを認めてほしい	1人
座席を前にしてほしい	1人
宿題の量を考慮してほしい	1人



一方、要望を出さない理由としては「学校に期待していない。理解されなかったから」「勉強については諦めていたから」などの記述が目立った

出しても無理、理解されなかったから	7人
勉強については仕方ないと諦めていたから	6人
保護者に障害の知識がなかったから	3人
納得していたから	2人
普通の子と同じように接してもらいたいから	2人
本人が友達と違うことをすることを嫌がるから	1人

### 3)学校生活面(友人・対人関係等)における 困難・ニーズ

表8 学校生活(友人・対人関係等)における困難 n=75

抱えている問題があった	54人	72.0%
特に問題はなかった	15人	20.0%

表9 具体的な問題(複数回答) n=127

障害を理解されず友達ができない、孤立	37人	29.1%
いじめにあう	28人	22.0%
本人が暴言を吐いてしまう	14人	11.0%
自分からすぐに手を出してしまう	12人	9.4%
不登校	9人	7.1%
非行や暴力行為	5人	3.9%

表9 担任や学校の対応 (記述式)

・特に対応はなかった、無理解・無関心(16人)
・一方的に叱られたり、謝らされたり、我慢することもしばしば(7人)
・なるべく目を離さないように気を配ってくれ、その都度、クラスメイトに適切な指導をしてくれた(6人)
・理解して対応はしてくれることもあったが、解決には至らなかった(3人)

- ・全体の72%の方が「問題があった」と回答した。
- ・とくに友人・対人関係の困難が大きい。
- ・学校・教師の対応として、適切な指導を行うという教師もいたが、障害への無理解のためにとくに対応がなかった、一方的に叱られたという記述も見られた。

### 学校生活を送る上での家族の負担の有無

58名(77.4%)の保護者が「負担がある」と回答、その内容は「学習面でのサポート」29.0%、「学校に理解を求める努力」27.7%が上位を占めた。「学校に理解を求める努力」では「いじめなど友人関係での問題が生じた時に対応を求めたり要望を出す」という意見が多かった。「学習面でのサポート」では「学校でできない部分を家で復習、練習して対応する」という保護者が多くいた。「送り迎え」「日常的な付き添い」と回答する保護者も多く、身体に障害のある場合は、復学の際に学校側から付き添いを条件とされているケースもあった。

送り迎え	34人	21.9%
日常的な付き添い	22人	14.2%
学校に理解を求める努力	43人	27.7%
学習面でのサポート	45人	29.0%
その他		
教育委員会への理解を求める努力	2人	1.3%
障害を受け入れるという事自体に	1人	0.7%
他のきょうだいへの対応	3人	1.9%
問題が起きるたびに学校に行く事	3人	1.9%
学校に行く気のない本人を行かせる事	1人	0.7%
学校とリハビリ通院の行き来など	1人	0.7%

### 学校生活を行うための家庭の工夫

塾・家庭教師、福祉サービスなどを利用	7人
親の思いは積極的に学校に伝えるようにした	7人
保護者でできるかぎりフォローをした(持ち物チェック、連絡ノート利用)	6人
担任や学校とは常に連絡を取り合うようにした	4人
学校に積極的に関わる、PTA役員になる	3人
学校の友人を積極的に家に招き、話や遊びの中で本人を理解してもらおうとした	2人
子ども同士のトラブルにも親が積極的に介入し声かけをした	2人
きょうだいが本人のことでいじめられることもあり、きょうだいとの関わりも大切にした	2人
きょうだいによく面倒を見てもらった	2人
本人の話をとにかく聞く、状態全てを受け入れる	2人
父母会で保護者に障害について説明した	1人
授業で直接子どもに話をする機会をつくってもらった	1人
学校を休まないように規則正しい生活をさせた	1人
必要なことや約束事は手帳に書かせていた。	1人



## 学校生活面での要望の内容

クラス替えでは理解のある友人と同じクラスにしてほしい、いじめた子と離れさせてほしい	11人
いじめへの適切な対応をしてほしい	5人
子ども同士のかかわりを大切にできるよう配慮してほしい	4人
密に連絡をとること、相談すること	3人
自発性が低いので積極的な声かけをしてほしい	2人
高次脳機能障害であることをわかってもらいたい。	2人
興奮したときには一人になれる場所を確保してほしい	1人
行事への部分的な参加を認めてほしい	1人
取り残されがちなので集団行動の中での配慮をしてほしい、気にかけてほしい	1人
父兄への対応をしてほしい	1人
病院との連携をとってほしい	1人



## 復学時における学校の対応

「必要な対応が行われた」と回答した保護者33名(44.0%)、「必要な対応は行われなかった」と回答した保護者は28名(37.3%)。  
「必要な対応が行われた」場合の具体的な内容については「病院関係者と話し合いなど連携をとってくれた」という記述が多く見られた。「必要な対応は行われなかった」という回答の中には「学校に復学の受け入れを拒否された」という意見もみられた。

病院関係者と話し合いなど連携をとってくれた	16人
介助員をつけてくれた、探してくれた	4人
掲示物や学級便りで入院中も本人の様子を常にクラスに知らせてくれ、戻りやすい雰囲気をつくってくれた	3人
忘れてしまった授業の復習をしてくれた。	2人
通常学級への部分的な参加から始めた	2人
すぐに復学させてくれて学校がリハビリの場になった	1人
肢体不自由の特別支援学級を開設してくれた	1人
手すりをつけるなど要望を聞いてくれた。	1人
家庭との連絡を十分に取ろうとしてくれた。	1人

## ● ● ● 復学にあたって一番心配だったこと n=75

「学習についていけるか」という回答が最も多く、ついで「友人関係でうまくやっていけるか」。

復学時における病院側の支援の有無は「あった」26人(34.7%)「なかった」29人(38.7%)という回答がほぼ半数ずつ、支援がある場合には「学校側との話し合いの場をもってくれた、学校に説明してくれた」という回答が多く見られた。

学習についていけるか	30人	40.0%
友人関係でうまくやっていけるか	19人	25.4%
生活上の配慮がなされるかどうか	12人	16.0%
特になし	4人	5.3%
回答なし	10人	13.3%

## ● ● ● 復学当時に悩みを相談できた人・場

(複数回答)n=182

最も多い回答は「家族」の45名(24.7%)であり、次いで「病院関係者」「学校教師」「友人」が27人(14.8%)。

家族	45人	24.7%
病院関係者	27人	14.8%
学校教師	27人	14.8%
友人	27人	14.8%
家族会	23人	12.6%
校外相談機関	10人	5.6%
そのような人はいない	11人	6.0%
親類	8人	4.4%
ボランティア	0人	0.0%
その他	0人	0.0%
回答なし	4人	2.3%



### 高次脳機能障害にある程度心の整理がついた時期 n=75

「現在もまだついていない」29名(38.7%)が最も高く、ついで「3年以上」17名(22.7%)。「3年以上」という回答のなかには受障から10数年と回答するものも多く、「高次脳機能障害という診断がついた時期」「学齢期が終わった時」という回答も見られた。

受障～1年未満	9人	12.0%
1年～2年	5人	6.7%
2年～3年	8人	10.7%
3年以上	17人	22.7%
現在もまだついていない	29人	38.7%
回答なし	7人	9.2%



### 高次脳機能障害児の教育支援において必要なこと

(複数回答) n=214

「教育・医療・福祉の連携」「学校と保護者の連携」「障害理解を進めるための校内研修」「専門職員の配置」「個別指導の充実」などが望まれている。

教育・医療・福祉等外部機関との連携	49人	22.9%
学校と保護者の連携	44人	20.6%
障害理解を進めるための校内研修	38人	17.8%
専門教員の配置	33人	15.4%
個別指導の充実	22人	10.3%
教員の加配	14人	6.5%
教育相談	8人	3.7%
校内設備等の環境整備	3人	1.4%
その他	0人	0.0%
回答なし	3人	1.4%

● ● ● | **高次脳機能障害児の教育支援において教師に求めること** n=75

半数の保護者が「高次脳機能障害の知識を持ってほしい」と回答

高次脳機能障害の知識を持ってほしい	37人	49.3%
障害児教育の専門性を持ってほしい	12人	16.0%
保護者の意見にもっと耳を傾けてほしい	5人	6.7%
個別の配慮を充実させてほしい	9人	12.0%
教育方針等について、詳しく説明してほしい	1人	1.3%
クラスメートに対して理解のための指導をしてほしい	2人	2.7%
その他	5人	6.7%
回答なし	4人	5.3%

● ● ● | **復学当初のそれなりの配慮**



**関わる教師、周囲の状況の変化**

**「理解、発達支援の乏しさ」**



**「孤立化・いじめ・不応」**



#### 4)進路面(移行支援)における困難・ニーズ

表10 進路で抱えていた不安 n=75

不安がある	54人	72.0%
特に不安はない	6人	8.0%
回答なし	15人	20.0%

- ・「**進学先**」と「**卒業後の就労**」に不安を抱く保護者が多い。
- ・ **通常学級と特別支援学校・学級の選択**に葛藤している保護者が多く見られた。
- ・ 多少の困難はあったとしても**通常学級への進学**を希望する方が多い。
- ・ **通常学級と特別支援学校の「中間」**の学校が欲しいという記述。

#### 就労について

表12 既卒の高次脳機能障害当事者の現況 n=39

有職者 : 一般就労	7人	17.9%
: 福祉的就労	9人	23.1%
<b>無職者</b>	<b>23人</b>	<b>59.0%</b>

- ・ 卒後は**一般就労の希望**が多いが、**既卒の当事者の状況**では**一般就労**をしている方は**少数(17.9%)**である。

#### 4)保護者と学校のかかわり

表13 学習面、学校生活面、進路面の保護者の要望の比較 n=75

	学習面	学校生活面	進路面
要望を出した	42人 56.0%	26人 34.7%	7人 9.3%
要望を出さなかった	29人 38.7%	37人 49.3%	9人 12.0%
回答なし	16人 21.3%	35人 46.7%	24人 32.0%

学習面では学校に要望を出すものが多いが、学校生活面、進路面についての学校に要望を出すものは少ない。

⇒・学校生活面の問題は見えにくく、保護者が子どもの様子を把握しきれていない。

・進路においては教師に相談するよりも家族で解決しようとする傾向にあることが示された。

表14 学習面、学校生活面、進路面における学校と保護者の共通理解度の比較 n=75

	学習面	学校生活面	進路面
共通理解ができなかった	28人 37.3%	35人 46.9%	12人 16.0%
共通理解ができた	25人 33.3%	39人 52.0%	11人 14.7%
回答なし	28人 37.3%	23人 30.7%	24人 32.0%

学習面、学校生活面では学校側との共通理解があまりできていない傾向にあった。進路面においては、「回答なし」の割合がとくに目立った。

・進路に関しては具体的な展望をもてない保護者が多く、学校と保護者、外部の関連機関との連携の不十分さが示唆される。



## 4. おわりに

①高次脳機能障害の子どもの多くは、元の通常学級に復学、あるいは進学する。

⇒外見から障害がわかりにくい場合が多く、周囲からの理解・支援が得にくいために、**学校生活においても多様な困難を抱え、適切な支援が行われにくい傾向にあることが明らかになった。**



②「**高次脳機能障害に対する理解の普及**」と「**他職種・家族と学校の連携**」にとくに高いニーズが示された。

⇒**高次脳機能障害への理解の普及啓発。**

**適切な復学先、進学先への移行がなされるよう、様々な機関との連携の中での支援に関する検討が必要。**



### 〈今後の課題〉

- ・本人の困難・ニーズ調査
- ・小中高校の教師への調査
- ・通常学級在籍と特別支援学校・学級在籍の高次脳機能障害児の教育実態の比較検討
- ・教育系大学の特別支援教育担当教授への高次脳機能障害に関する講義・演習調査



### 文献

池田理恵子・高橋智(2009)学齢期の高次脳機能障害児の困難・ニーズと支援に関する研究—保護者調査から—、『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第60集、pp.293-321。

高橋智・田部絢子・石川衣紀(2012)発達障害の身体問題(感覚情報調整処理・身体症状・身体運動)の諸相—発達障害の当事者調査から—、『障害者問題研究』第40巻1号、pp.34-41。